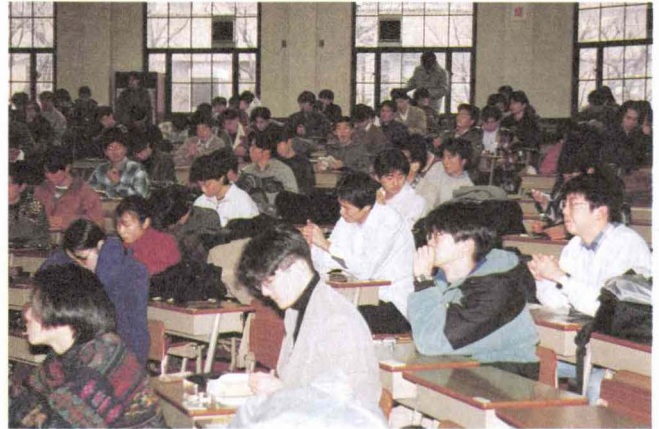
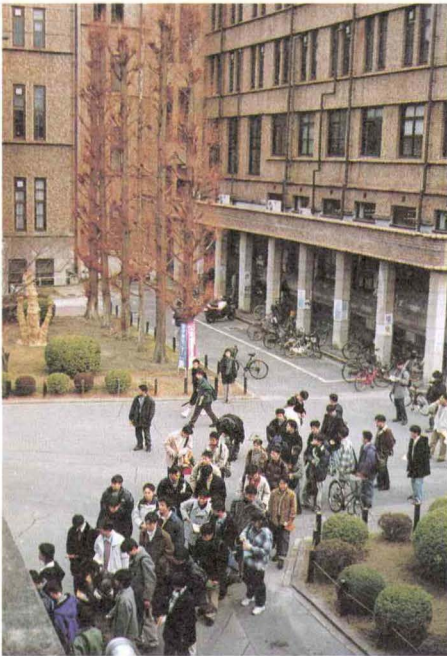


京大広報

No. 500

京都大学広報委員会



平成8年度前期入学試験風景

目次

『京大広報』500号に寄せて 総長 井村 裕夫…1125	<随想>
<紹介>	女子学生興国論
原子炉実験所・原子炉安全管理	名誉教授 大寿堂 鼎…1132
研究部門……………1126	附属図書館利用証の
<資料>	変更・交換について……………1133
平成7年度教育実習状況……………1129	京都大学創立百周年記念
訃報……………1130	「新学歌」募集……………1134
<コラム>	お知らせ……………1135
留学生センターの行方 森 真理子…1131	

『京大広報』 500号に寄せて

総 長 井 村 裕 夫

『京大広報』は、昭和44年（1969）5月に創刊され、原則として月2回刊行されてこの度500号を数えることになりました。この間『京大広報』は、大学の動きを全構成員に伝える重要な情報のメディアとして、大きい役割を果たして参りました。また「随想」や「洛書」などのコラム欄も充実し、着実に愛読者を増やしてきました。

今日のように巨大化した大学にあっては、構成員間のコミュニケーションをはかることが大変大きな課題となります。このことは社会も大学も大きい変革の時期を迎えている現在、とくに重要であると考えられます。しかしいくつもの部局に分かれ、しかも学生から教職員まで世代も大学における役割も異なる構成員の間で、十分なコミュニケーションをはかることは大変難しいことと言わねばなりません。その中において『京大広報』は全学的なレベルでの様々な情報を正確に伝達するメディアとして、極めて重要な位置を占めて参りました。今後コンピュータを使った新しいメディアも発展していくことと考えられますが、しかし人類が何千年にもわたって親しんできた活字による情報伝達には捨て難い味があり、『京大広報』の重要性は決して変わることがないと思われます。

500号を迎え『京大広報』の刊行形式が若干変更になります。大学改革の時代にあって、より多くの委員会などの情報を伝えられるよう紙面の工夫がなされる予定であります。そしてより若い世代の方々の寄稿も増やして行きたいと考えています。

最後に『京大広報』の刊行に御努力を頂いた歴代広報委員の方々、事務局広報調査課の皆さんに深謝するとともに、500号を迎えて『京大広報』が一層親しみのある広報誌になることを祈っています。



<紹介>

原子炉実験所・原子炉安全管理研究部門

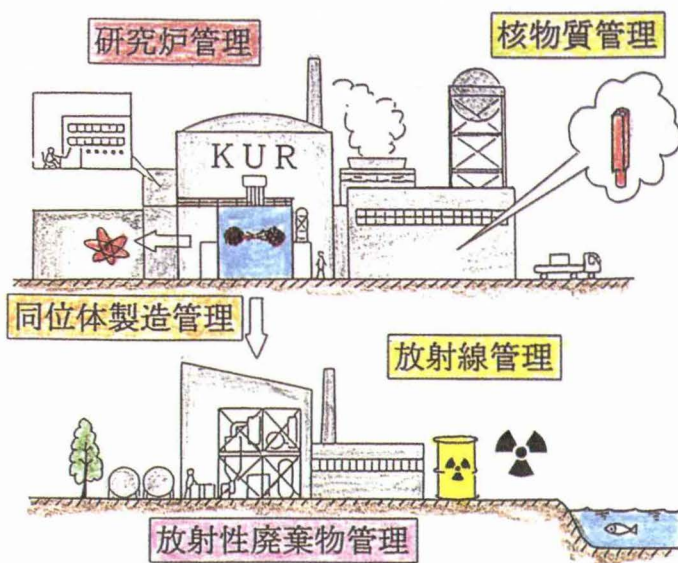
原子炉実験所は昭和38年4月に設置され、その名のとおり研究用の原子炉(KUR)を主たる研究施設とし、6研究部門(原子炉、原子炉設備、ホットラボラ設備、計測装置、廃棄物処理設備、放射線管理)より構成されていた。当時は、原子炉の運転安全管理業務と研究炉を利用した研究活動とが分化してなく、これらの研究部門は両面を担っていた。その後、学術の進展にとまらぬ、研究的色彩の濃い、例えば核生物学、低速中性子物理学、放射線化学等の研究部門が順次増設され、平成6年度時点においては、16研究部門と2附属施設になっていた。先年来、高中性子束炉建設計画撤回を機に、原子炉実験所の在り方が見直され、その結果として、研究炉運転に関する安全性と信頼性の一層の向上を図り、新しい時代に求められる研究炉を利用したより高度な研究に取り組むための改組が平成7年4月に実施された。

原子炉安全管理研究部門は、この改組によって再編成された部門であって、5研究分野(研究炉管理、核物質管理、放射性廃棄物管理、放射線管理、同位体製造管理)からなり、教授5名、助教授8名、助手12名の定員を擁するいわゆる大部門である。

広く人間社会が、原子力エネルギーを利用し、原子核科学を実際に役立たせるには、これらに伴う安全性の確保は必須である。その安全性に関する研究は、自然科学の分野に限らず、人文科学や社会科学までに関わり、学際的に進められ、また、原子力発電技術等の実際的課題に関連をもちながら進められることになろう。原子炉安全管理研究部門が大部門とはいっても、原子炉の安全に関する全ての分野の研究に取り組むわけではない。ただ、この部門は、当実験所の技術室と協力して、KURの安全確保と円滑な運転に関し、直

研究分野

- 1) 研究炉管理
- 2) 核物質管理
- 3) 放射性廃棄物管理
- 4) 放射線管理
- 5) 同位体製造管理



KURの安全・円滑な運転を支援する5研究分野

接的な責任をもっている。KURは原子力発電炉に比べれば相当に小規模ではあるが、類似の点は多い。従って、取り組むべき課題は原子炉の安全管理に関してあまねく拡がり、個々の研究も要素還元的なものに限らず、システム工学的な観点から取り組むことが必要となる。

以下に、現在のスタッフが取り組んでいる研究課題を紹介する。

研究炉管理研究分野では、研究炉の長寿命化に関する技術的諸問題(例えば防食技術)、原子核工学の基礎的な研究として中性子反応断面積の測定、原子炉の地震問題等に関する研究に取り組んでいる。反応断面積の測定では、ネプツニウムやアメリカシウムを取りあげて、発電炉で生じる半減期の長い放射性核種の消滅処理の研究を行っている。地震問題では、先年来地震観測システムを備



研究炉 (KUR, 後方) と臨界集合体 (KUCA, 手前)

え、中小地震の観測から大地震時の強振動を合成する方法を開発した。

核物質管理研究分野は、先述の改組において重点の置かれた一分野であって、核分裂や臨界安全などの原子核工学における基礎研究とともに、核燃料の輸送・貯蔵、安全保障措置、防護システム、国際情勢の調査・分析等に取り組んでおり、これらは全て KUR や KUCA (臨界集合体) 燃料の入手・加工・使用・使用済み燃料の搬出等に欠かすことの出来ない取り組みである。

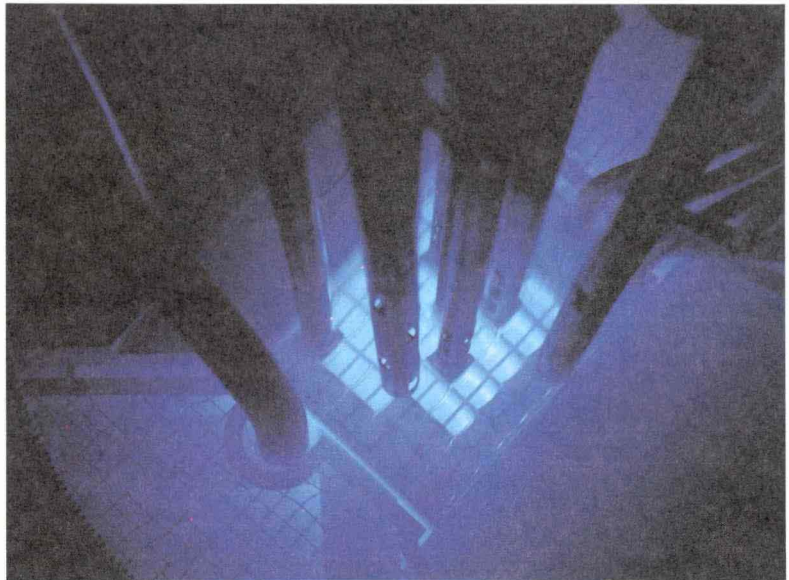
放射性廃棄物管理研究分野は、原子力施設から放出される放射能の低減をめざし、放射性廃液の処理に関する工学的諸問題に取り組んでいる。その成果は、KUR の運転および実験所での研究活動から生じる廃液の処理において、環境への放出を最小限に抑えることに生かされている。同分野では、他に、環境中、特に土壌中における放射性物質の挙動に関する研究や放射性廃棄物管理をより合理

的に実施するための方法論の開発研究を進めている。

放射線管理研究分野は、放射性物質の原子炉施設内外における挙動と環境や人体への影響の評価に関する研究、放射能測定技術の開発研究、トリチウムなどの放射性物質の体内での動態の研究などの放射線管理上の主要な研究課題に取り組んでいる。さらには、大気気象学の基礎研究に取り組む、その成果は、原子力施設に関する環境保全

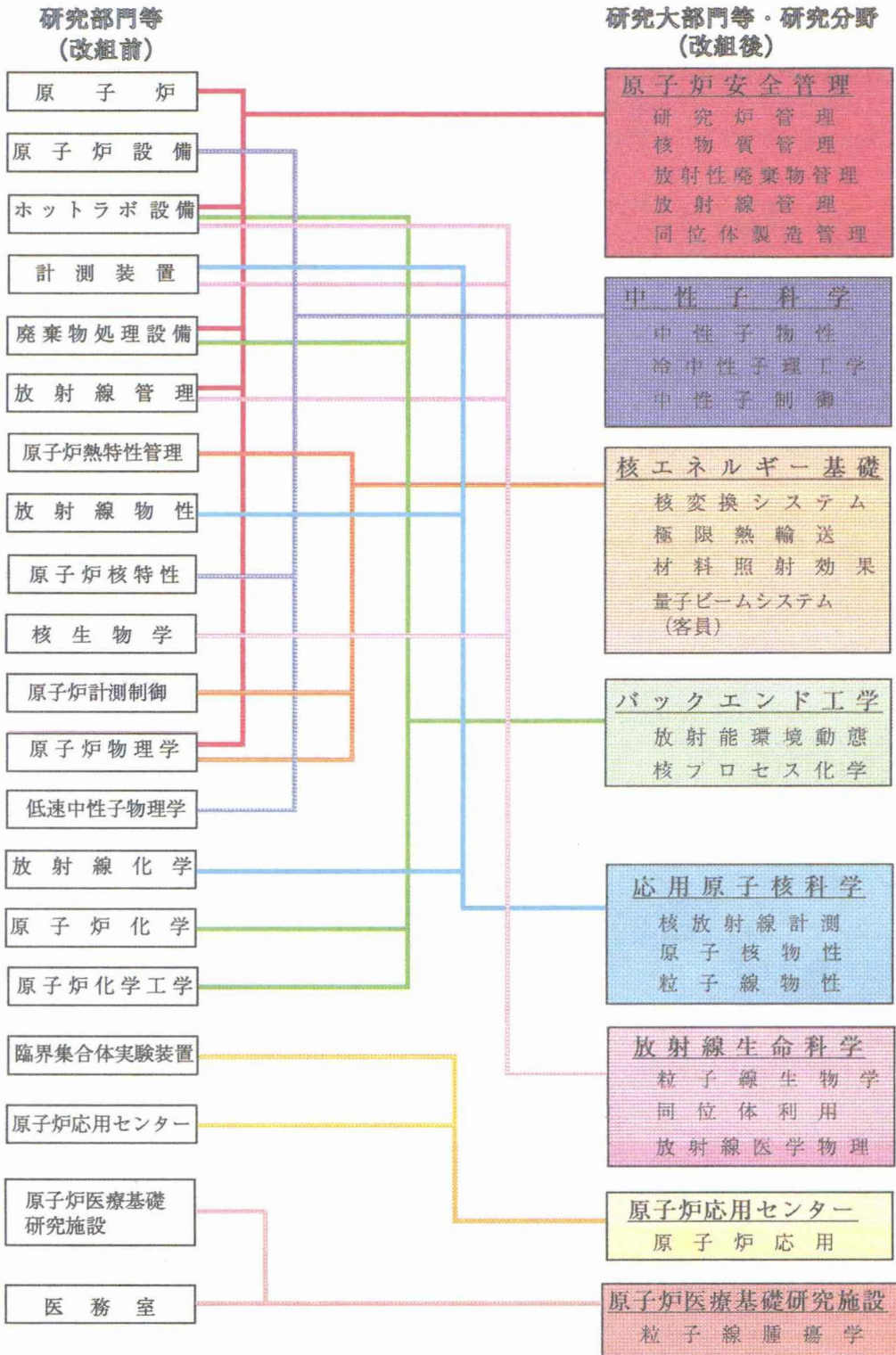
に限らず、広く地球環境の保全に寄与している。

同位体製造管理研究分野は、KUR による照射設備およびホットラボラトリー設備の安全管理と利用の高度化の役割を受け持っており、来所する KUR の共同利用者の多くと直接に接触している。この分野には化学系の者が多く、中性子放射化分析を主とした分析化学、および核反応の化学効果や同位体効果などを扱ういわば核種レベルの化学に取り組んでいる。



KUR の炉心

研究組織移行図



(原子炉実験所)

<資料>

平成7年度教育実習実施状況

教育実習は教育職員免許状の取得を希望する者にとっては必ず修得しなければならない単位であり、教育職員免許法に基づき教育実習にかかわる事前および事後指導の1単位を含め3単位修得しなければならないものである。

本学では、事前指導として、例年、5月中旬にまず教育実習オリエンテーションを2日間実施し、教育実習一般、民族教育、障害者教育、同和教育について講義を行い、さらに各教科別に具体的な事前指導を実施している。

附属学校をもたない本学としては、教育実習は原則として履修希望者の出身学校（高等学校、中学校のいずれでも可）の協力を得て実施している。出身学校で内諾を得られない場合は京都市立学校において実施されている。実習期間は5月中旬から11月中旬までの間の2週間である。

事後指導は、全体の教育実習が終了後、各教科別に行われる。

単位の認定については、教育実習校から報告される教育実習成績報告票および実習生が提出する教育実習ノートと事前および事後指導の評価を勘案して教育学部において行われる。

履修状況は、昭和63年12月の教育職員免許法の改正による必要修得単位数の増加ならびに新規教育職員の採用数減等の影響により昭和50～60年代に比して減少傾向にあったが、ここ数年は履修者数がやや増加し、200名を若干上回る数を保っている。

なお、平成7年度の教育実習は、38都道府県の国公私立高等学校124校、中学校18校、養護学校3校の協力を得て実施された。

1. 学部別の履修状況

区 分	学 部 ・ 研 究 科										計
	文	教	法	経	理	医	薬	工	農	人間・環境	
参加申込者	(3)人 60[3]	(1)人 30[1]	8人	(1)人 7	(9)人 48[1]	0人	(1)人 8	(3)人 16	(5)人 31	0人	(23)人 208[5]
取り止めた者		1		1	(1) 4						(1) 6
実習終了者	(3) 60[3]	(1) 29[1]	8	(1) 6	(8) 44[1]	0	(1) 8	(3) 16	(5) 31	0	(22) 202[5]

(注) 枠内の〔〕は科目等履修生、()は大学院生数でいずれも内数。

2. 実習を行った学校

区 分	学 部 ・ 研 究 科										計
	文	教	法	経	理	医	薬	工	農	人間・環境	
京都市立中・高校	1人	人	人	人	人	人	1人	人	1人	人	3人
京都市立養護学校		3									3
取り止めた者											0
京都市立学校実習終了者	1	3					1		1		6
出身中・高校等	59	27	8	7	48		7	16	30		202
取り止めた者		1		1	4						6
出身中・高校等実習終了者	59	26	8	6	44		7	16	30		196

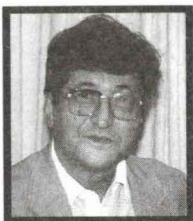
3. 教科別, 校種別実施状況

区 分		学 部 ・ 研 究 科										計
		文	教	法	経	理	医	薬	工	農	人間・環境	
国 語	中 学 校	1人	1人									2人
	高 等 学 校	13	11		1							25
英 語	中 学 校	1	2									3
	高 等 学 校	12	6		1							19
社 会	中 学 校	1	1							2		4
公 民	高 等 学 校	5	1	8	2							16
地 歴	高 等 学 校	26	3							1		30
理 科	中 学 校					1		1		3		5
	高 等 学 校		1			27		7	4	24		63
数 学	中 学 校					3			2			5
	高 等 学 校				1	13			10	1		25
保 健 体 育	中 学 校											0
	高 等 学 校	1										1
商 業	高 等 学 校				1							1
計	中 学 校	3	4			4		1	2	5		19
	高 等 学 校	57	22	8	6	40		7	14	26		180
養 護 学 校			3									3
合 計		60	29	8	6	44		8	16	31		202

(教職教育委員会)

訃 報

寺 本 英 名 誉 教 授



本学名誉教授 寺本 英 先生は、2月7日逝去された。享年70。

先生は、昭和22年京都帝国大学理学部物理学科を卒業、同大学理学部助手、講師、助教授を経て、同40年11月本学理学部教授に就任、物理学科極低温物理学講座を担当された。その後、昭和44年同学部に新設された生物物理学科の原形質物性学講座、ついで理論生物物理学講座を担当、同

63年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、京都大学評議員、理学部長等を歴任、京都大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、平成元年4月から龍谷大学理工学部教授、同7年4月から兵庫大学経済情報学部教授として私学教育の発展に尽力された。

先生は、物理学から生物学まで幅広い領域にわたって活躍され、特に世界に先駆けて行われた高分子の排除体積効果の理論的研究は、国際的にも大きな評価を得ている。統計物理学の分野では、生体高分子の物性や化学反応の理論を精密化された。また数理生物学の分野では先駆者として特に生態系の構造と安定性に関する数々の独創的理論

を樹立し、種の存続や滅亡に関する法則性を明らかにされた。

また、先生は日本生物物理学会会長、日本生態学会近畿支部長等の要職を歴任されると共に、日本学術会議生態・環境・生物学研究連絡委員とし

て我が国のこの分野の研究の発展に大きく貢献された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(理学研究科)

<コラム>

洛書

全国の留学生センターに先駆けて、京都大学に留学生センターが発

足して早いもので5年半になる。振り返って回顧にふけるほど長い年月ではないにしろ、草創期をその仕事に携わった人間にとっては、現在も、恐らく将来も幾分かの感慨をもって語られるに十分な時間であったといえる。

思えばこの6年間は、例えていうなら全くモデルのないところにデザイン画を描き、そのデザインを形あるものに造り上げ、そこに息を吹き込む作業を幾たびも繰り返す、文字通り試行錯誤の連続であった。

留学生センターは設立後日が浅いうえに、仕事自体も外から見てあまり目立たない地味なものである。その証拠に、直接留学生を受け入れていない教官諸氏から、そういう機関は大阪外大にあるのではないかという質問をつい最近までしばしば受けてきたほどである。しかし事実はそうではない。年を追う毎に増えて行く留学生の教育と指導に明け暮れ、少ないスタッフで、ともすれば日常の尋常ならぬ多忙さに限界を感じながらも、骨格となるべきセンター創設の理念は何だったかということを実あるごとにもう一度立ち止まっては思い返し、そこでまた少しばかりやる気を取り戻す。そのようにしてまがりなりに進んで来

たつもりである。

その時いつも思いの中心をなしていたものは何であったか。それは、留学生センターは今何を求められているかではなく（勿論その点は大学組織の一員として存在する限り無視できないことではあるが）、私たちは一体全体これから何をしようとしているのか、つまり他ならぬ京都大学の留学生センターは今後どの方向に向けて舵を取っていくべきなのかという根本的な問いかけであったように思う。

求められていることをこなしていただけなら

受け身の姿勢を上手にと

るだけで事足りる。しか

し事この点に関しては自

分たちの行く先を手を取

って導いてくれる先達は

誰ひとりとしておらず、

ひたすら手探りで方向を

模索してきた6年間であ

ったように思う。そして

その答えは今のところ

まだ出ていない。

森 眞 理 子

来年度、我が留学生センターでは現在の4人のスタッフに加え3人の新しいスタッフを迎えることが決まった。現在は未知数の力であるが、これらのスタッフとの出会いが留学生センターの新しい方向を生み出す原動力となり、国際化という当節のはやりことばをはずした時にも十分通用するような、このセンターでしかできない主体的な研究や教育となって結実することを願って止まない。

(もり まりこ 留学生センター助教授)

附属図書館利用証の変更・交換について

附属図書館では平成8年3月の入館機更新に伴い、すべての図書館利用証をバーコード併記式に変更いたします。カード表面にバーコードの記載のない利用証をお持ちで、平成8年度以降も在籍される方は下記により新利用証と交換して下さい。

なお、平成7年4月以降に交付された利用証の表面には、既にバーコードが入っていますので交換の必要はありません。

バーコードの利用証による入館は4月から実施され旧カードは3月末で利用できなくなります。

交換期間：3月23日（土）までの月曜日～土曜日

午前9時より午後5時まで（但し土曜日は午前10時から）

入館機工事のため3月25日（月）より臨時休館しますので、交換手続きは早めにお済ませください。

交換場所：附属図書館正面玄関内

交換の対象者は全部局の学生・院生（現在1回生及び今春卒業・修了予定者を除く）。

教職員の新利用証については、所属部局で交換・配布しているところもありますので、詳しくは附属図書館資料運用掛（内線2632）までお問い合わせください。

現行の利用証 (例) 変更後の利用証

京都大学 図書館利用証	
矢印の方向に入れてください。	
←	835000001
氏名	京大 太郎
所属	文学部
	有効期限 **.**



京都大学 図書館利用証	
矢印の方向に入れてください。	
←	835000001
氏名	京大 太郎
所属	文学部
	有効期限 **.**

(附属図書館)

京都大学創立百周年記念 「新学歌」募集

現在の京都大学学歌は昭和15年に制定され、荘厳な落ち着いた雰囲気をもつ学歌として、永年にわたり斉唱されてきましたが、このたび創立百周年（平成9年）を記念して、新学歌を公募することになりました。

多数ご応募ください。

募集内容：創立百周年を記念し、明るくて歌いやすい、新しい感覚の新学歌を制定するため、その歌詞と曲を募集します。

応募方法：応募形態は歌詞のみ、歌詞と旋律、歌詞と旋律とその伴奏いずれも可とします。

①歌詞は2節または3節とします。

A4判の用紙を用い、1枚につき1点とします。

②歌詞の裏面に簡単な説明と住所・氏名・電話番号・性別・年齢を明記してください。

ただし、審査の際には性別・年齢等をふせて行います。

③曲はB4判またはA3判程度の五線紙を使用してください。

④楽譜はメロディーのみ、コード付き、伴奏譜付きなど自由とします。音符の下には歌詞をつけてください。

⑤応募点数の制限はありません。

応募資格：著作の使用に制約のない人とします。

グループ・共作でも結構です。

応募の条件：①自作・未発表のものに限ります。

②応募作品はお返ししません。

③新学歌に採用された作品の著作権は、京都大学に帰属します。

応募締切：平成8年7月31日（水）

当日消印有効

選考：応募のあった作品は、選考委員会で審査し、最優秀作品に選考された作品を新学歌に採用する予定ですが、必要に応じて補作する場合があります。

選考結果の発表は平成8年10月頃を予定しています。

その他：最優秀作品応募者には、歌詞のみの場合は賞状並びに賞金20万円、歌詞と旋律の場合は賞状並びに賞金30万円を財団法人京都大学後援会から贈呈します。

なお、最優秀作品の該当者がいない場合は佳作数点に記念品を贈呈します。

**応募先及び
問合せ先：**庶務課「学歌係」へ持参又は送付してください。

〒606-01 京都市左京区吉田本町

京都大学庶務部庶務課「学歌係」

☎(075)-753-2028



創立百周年記念シンボルマーク

お 知 ら せ

『京大広報』は、次号（4月1日号 No. 501）から月1回の発行となり、紙面はA4判となります。

これを機会に、更に内容の充実を図っていきたいと考えています。

広報委員会では、今後も読者のご意見を紙面にとりいれながら工夫していきたいと考えています。

なお、その一環として今後は『京大広報』に掲載する写真・挿絵等を学内教職員・学生の方から募集していきます。皆様のご協力をお願いします。

〈写真・挿絵等の応募要領〉

1. 内 容：京都大学に関するものなら内容は特に問いません。例えば観測所や演習林などの各施設の四季の風景写真等なんでも結構です。
2. 形 式：特に問いません。
3. 説明文：簡単な説明文をつけてください。
4. 採 否：採否は広報委員会にご一任願います。
5. 締 切：特に期日は設けません。
6. 送り先：京都大学庶務部広報調査課気付

京都大学広報委員会

(京都大学広報委員会)

